

【その他】

浜松市リハビリテーション病院における 臨地実習指導マニュアルの作成

大鷹 悦子* 足立美佐江* 臼井 友美* 水野 彰子*
中村真理子* 岸 あゆみ** 石塚 淳子**

*浜松市リハビリテーション病院

**聖隷クリストファー大学看護学部

A manual for nursing training guidance in the Hamamatsu City Rehabilitation Hospital

Estuko OTAKA, Misae ADACHI, Yumi USUI, Akiko MIZUNO
Mariko NAKAMURA, Ayumi KISI, Junko ISHIZUKA

Hamamatsu City Rehabilitation Hospital
Seirei Christopher University School of Nursing

抄 録

浜松市リハビリテーション病院は平成11年12月に旧国立病院より移管、開設された、病床数180床、4病棟を有するリハビリテーション専門の病院である。平成17年度より聖隷クリストファー大学の基礎看護実習を受け入れることになった。臨地実習の受け入れは初めての経験である。そこで、実習指導者を立ち上げ各病棟から実習指導者を選出し、実習指導者マニュアルの作成、基礎看護実習の実習指導案の作成、実習に必要な物品の整備などを行った。その経過と実習指導の実際、実習指導者の振り返りを報告する。

キーワード：実習指導者 臨地実習指導マニュアル 実習指導案
基礎看護実習

I. はじめに

浜松市リハビリテーション病院（以下、当院）は平成11年12月に旧国立病院より移管、開設された。病床数180床、4病棟を有するリハビリテーション専門の病院である。

平成17年度より聖隷クリストファー大学の基礎看護実習を受け入れることになった。臨地実習の受け入れは5年ぶりのことであり、当院として初めての経験である。そこで、実習指導者を立ち上げ各病棟から実習指導者を選出した。そして実習指導者会のメンバーが臨地実習をスムーズに受け入れるために必要な事項を抽出し、準備を進めた。実習指導者マニュアルの作成、基礎看護実習の実習指導案の作成、実習に必要な物品の整備などを行った。大学の実習担当者との打ち合わせをしながら実習指導案を活用してイメージ化を図り実習指導に臨んだ。

その経過と実習指導の実際、実習指導者の振り返りをまとめたのでここに報告する。

II. 実習受け入れまでの準備

1. 実習指導者マニュアルの作成（資料1）

臨地実習指導者講習会での資料や既存のマニュアルを参考に当院の現状にあわせて作成した。実習指導者の役割を明確にし、指導者としての自覚をもてるようにした。

2. 聖隷クリストファー大学看護学部の臨地看護実習の手引き、臨地看護実習指導の手引きを読み、目的・目標、実習内容の理解につとめた。基礎看護実習要項を熟読し実習指導のイメージ化を図った。

3. 基礎看護実習Iにおける学生の目標が達成できるように実習指導案を作成した。指導案はオリエンテーション日（1日目）と病棟実

習日（2・3日目）を作成した。（資料2）

4. 実習に必要な看護用品をリストアップし、必要数を確認、補充した。

5. 実習指導者会議を開催し、大学教員と実習指導者全員が集まり、実習指導案の確認、役割分担、受け持ち患者の選定方法、オリエンテーション方法など、合同で話し合いを行った。

III. 実習指導の実際

今年の実習初日の臨地オリエンテーションが台風のため、実習中止となった。初日のオリエンテーションが2日目に食い込み、学生は行動計画を十分に立案できないまま実習開始となった。

しかし、病院全体で学生を受け入れる体制を各部署に連絡し、整えて待っていたので、病院内探索はスムーズに進んだ。

今回は一人の担当教員が2病棟を掛け持っていたので、実習指導者の勤務調整をし、実習中はフリーの業務とし、学生の実習指導に専念できるように配慮した。

IV. 学生と担当教員、および実習指導者の反応

実習終了後、学生と担当教員に実際の実習指導について意見を聞いた。

以下にそれをまとめてみる。

1. 学生より

1) 実習指導に対して

- ・看護師さんたちはみんな丁寧に説明してくれた。質問しても嫌がらずに答えてくれた。
- ・看護師さんたちが話しをしているとき（カン

ファレンス) 話しかけていいのか困った。

- ・看護師さんが受け持ち以外の患者さんと話している時、そこにいていいのか、迷った。
- ・カンファレンスで実習指導者の方の体験を聞くことができ、感動した。
- ・実習指導者の看護師さんがかっこよかった。ああいう看護師になりたいと思った。
- ・院内の探索で時間が足らなかった。検査室のところで時間をとった。
- ・実習反省会に来ていただいたので、発表で緊張した。でも、来てもらってうれしかった。

2) その他

- ・リハビリテーション病院がどういうところなのか、わからなかったので、実習前はとても不安だったが、終わったらこの病院で実習できてよかったと思う。
- ・リハビリテーションについて興味を持つことができた。これからもっと勉強したい。
- ・病院の雰囲気がとても明るかった。職員の人々はみんなあいさつしてくれた。

2. 担当教員より

1) 事前準備について

事前に実習指導者全員と担当教員が打ち合わせできたことがよかった。このような機会は是非続けてほしい。

2) 実習指導者の指導について

- ・朝の業務伝達の前や後に、指導者の看護師さんたちを一人ひとり紹介してくれたので、学生の緊張がほぐれ、実習に入りやすかった。
- ・実習指導者に報告をすることがどういうことなのか、どのようにすればいいのか、初めての学生に根気強く、柔らかに指導してくれたので、学生にとって緊張が和らぎ、報告しやすい雰囲気をつくってくれていた。学生が考えていること、前日の実習の状況などを上手

に引き出してくれていた。

- ・カンファレンスでのアドバイスは、学生にとって貴重な看護の先輩の生の声として捉えられていた。アドバイスが学生のレディネスに合致していたのでよかった。
- ・実習反省会に全員で来てくれたこともあり、学生は発表の準備に力を入れていた。関係者の方たちが自分たちに関心を持ってきている、と喜んでいて。他の学生たちにもよい刺激になった。
- ・学生が援助場面の見学をする場合、実習指導者が受け持ち看護師や看護助手との調整をしてくれたため、学生が援助場面に入りやすくなり、配慮してもらえた。
- ・受持ち患者さん以外でも援助や処置がある時には積極的に声をかけてくれたため、より一層、学生の積極性が引き出されていった。

3) スタッフへの連絡調整について

- ・事前に病棟全体へ実習目的や指導方法を伝えてくれていたが、実際の場面で学生にどのように指導していいのか、迷っている場面があった。それに関しては、その都度、タイムリーに実習指導者や教員が気づいた場面で確認していくしかないと思う。戸惑う場面は、直ぐに教員を利用して確認してほしい。
- ・ほとんどの受け持ち患者が訓練室で過ごすので、学生が見学をしている場面にPTやOTは何を見学しているか、疑問だったようである。

以上のように、実習が大変やりやすかったという感想をもらった。初めて実習を受け入れるという不安は大きかったが、事前準備にエネルギーをかけた成果ではなかったかと自負している。

さらに、実習指導者たちにも実習指導は大きな影響を与えた。実習指導者が毎日の実習が終

わったとき、1枚の【ラベル】に感想を書いてもらい、最後にまとめてみた。(表1)

短い実習であったが、学生の新鮮な学びの姿に感動し、自分自身の看護を振り返るとともに、これからも頑張ろう、という意欲づけにもなった。

V. 考察

臨地実習指導者講習会に参加したメンバーは実習日毎の指導案の作成方法を学習していた。しかし、これまで実際に指導案を作成して指導した経験はなかった。せっかく学んできてそのノウハウは活用されていなかったのである。

今回、臨地実習指導者講習会で学んだ指導案の作成を試み、指導案をもとに現場で実践し、指導に活用できたことは有意義であった。指導案を作成することで、実習目標を達成するためにどのような実習内容が必要なのか、実習場面ではどのような配慮や指導が必要なのかを明確にすることができた。

今回の実習は台風のため、実習期間が2日間に短縮され、指導案通りに実践できなかったが、事前準備があったからこそ、大きな混乱もなく終了できたと考える。

学生個々の目標達成状況や実習中の行動に対して注目し、個別性のある指導案に変化させていくことも重要である。

IV. 今後の課題

今回の経験を生かして、指導案の見直しを図っていきたい。実習指導者だけでなく、日々、学生を担当する受け持ち看護師も活用できる内

容にしていく必要がある。また、基礎看護実習Ⅰだけでなく、実習期間の長い基礎看護実習Ⅱについても実習指導案を作成していきたい。

参考文献

- 1) 細田泰子、山口明子 (2004) : 実習指導者の教育的アプローチの特徴とその関連要因、日本看護学教育学会誌、14 (2) pp1-16.
- 2) 白木智子、進藤美樹、田村美子、田村紀子、中柳美恵子 (2005) : 看護学生が臨床指導者から受ける肯定的ケアリング体験、看護展望、30 (3) pp394-399.
- 3) 田中千裕、浅尾真理子 (2005) : 臨地実習指導者の育成指導者を支える環境作りを考える、日本看護学会論文集(看護教育)、pp259-261.
- 4) 田中千裕、浅尾真理子、石川智恵子 (2005) : 臨地実習指導者を育てる職場環境づくりと効果的な指導、看護教員と実習指導、2 (1)、pp51-58.
- 5) 橋本富子 (2005) : 達成感！看護の本質を学んだ学生 学生と臨地実習指導者の相互理解を目指した臨地指導者会での取り組み、看護教員と実習指導者、1 (6)、pp86-92.
- 6) 安藤高子、森千鶴 (2003) : 臨地実習において学生と『共に学ぶ』ことを再確認した臨地実習指導者の変化 日本看護学会論文集(看護教育) 34号、pp177-179.
- 7) 高木薫 (2001) : 臨地実習における指導者のもつ問題、文献に見る臨地実習指導上の悩みや困難、神奈川県立看護教育大学校看護教育研究集録、26号、pp174-181.

表 1 実習指導に関する臨床指導者の感想

学生の学びに対して

2日間という短い実習期間の中で多くの気づき、学びが得られたことには正直驚いた
学生一人ひとりの実習内容に違いがあると思うので、グループ内で情報の共有をしてほしい
学生の新鮮な視点に日常化した看護ケアの見直しをすることができた
看護の道を目指してよかった？という問いに全員が迷わずうなずいた時、本当にうれしく思い感動した
私も自分の仕事に自信がもてた
2日目のカンファレンスで流した涙、想いはずっと持ち続けてもらいたい。
私自身の振り返りにもなった
ひとつひとつの発見が新鮮！自分も職場について見直したいと思った
私の話を聞いて、目を輝かせてくれたのがうれしい。
緊張しながらも、患者に接することができていたので安心した

学生の指導について

初めての実習指導者ということで、どのように学生と関わればいいのか、戸惑った
どこまで指示、指導すればいいのか悩んだ
学生が何を学ぼうとしているのか、が見えず、アドバイス、指導することができなかった
ナースとしても具体的な目標があると指導しやすい
目標に対して、高度な事を求めすぎたのではないかと少し心配だった。
初めての実習の受け入れはうまくいったと思う
学生指導についての他のスタッフからのクレームはなかった
学生の目標が多すぎて心配だった。もう少し絞ってじっくり観察させてあげるべきだった
前半の学生の気づきを後半に教えてしまいそうになった
今回は担当の患者を決めて行ったが、担当看護師について実習する方法でもいいと思う
フリーなので、スタッフも学生の動きを確認しやすい
マンツーマンの指導でいろいろ経験できたのではないかと
スタッフには病棟会で伝えたが、理解されていなかった
患者へのご案内や指導してくれるスタッフあてのポイントが無駄になってしまった
スタッフのすべての受け持ち患者の紹介をしていた
スタッフが難しいことを説明しているのを見かけた

その他

合同のカンファレンスは刺激になると思った。取り入れたい。
患者へ依頼するときは緊張した。承諾してくれるとほっとした
実習1日目のスタートがナースと共に行動できなかったのが中途半端な感じがあった
1日目はオリエンテーションもあり、実習への流れがスムーズに行えなかった
天候のハプニングで行動計画も変更になったが、心の準備ができて助かった
16時までの病棟実習は午後に余裕を感じる

資料1

浜松市リハビリテーション病院 臨地実習指導マニュアル
実習指導者の役割と内容

目的 学生が看護専門職として、看護の対象を総合的に理解し、実践に必要な基礎的能力および態度を養えるよう教育指導する。

目標

1. 臨地実習ができる人的、物的環境を整える。
2. 学生の実習意欲を向上させ、看護への意欲、能力向上への動機付けをする。
3. 科学的根拠にもとづいた看護を実践し、指導者自身の看護観を学生に伝えながら、理論と知識の統合を図ることができるよう指導する。
4. 看護者の倫理綱領に基づいて行動できるように指導する。

行動目標

1. 臨地実習ができる人的、物的環境を整える。
 - 1) 臨床での学習環境を整える。
 - (1) 実習指導者会で、指導の継続性を図る。
 - ・実習目的・目標・内容を理解する。
 - (2) 看護長・副看護長・スタッフ間での連携を密にし、実習指導の調整をする。
 - ①実習前
 - ・病棟運営会議などで、スタッフ全体に実習の目的・目標・内容、指導のポイントを具体的に伝える。
 - ・実習指導に関する資料（指導要項など）は定位置に掲示しておく。
 - ・学生の受け持ち患者を決定する場合は、看護長・副看護長・担当教員と打ち合わせをする。
 - ②実習中
 - ・スタッフに学生を紹介する。
 - ・学生の実習計画をスタッフ全体で共有し、アドバイスできるようにする。
 - ③看護長・副看護長との連携
 - ・病棟の概要や方針についてオリエンテーションを依頼する。
 - ・学生の受け持ち患者を紹介するよう依頼する。
 - ・学生の実習状況を報告する。（患者とのトラブル、事故、実習態度など）
 - ・学生カンファレンスへの参加を依頼する。
 - ④スタッフとの連携
 - ・当日の学生を担当する看護師に指導ポイントを明確に伝える。
 - ・学生を担当した看護師より適宜情報収集する。
 - ・学生カンファレンスへの参加を依頼する。
 - ・学生の立案した看護計画をスタッフカンファレンスの場で検討し、実践できるようにする。
 - (3) 学校との連携を密にし、調整する。
 - ①実習指導者会で実習全般についての検討をする。
 - ②担当教員との連携を密にする。（実習に関する問題等）
 - ③実習前
 - ・学生のレディネスを把握する。
 - ・実習指導要項、計画の確認をする。
 - ・学生に関する情報交換をする。
 - ・受け持ち患者の決定と指導課題を共有する。

- ④実習中
 - ・担当教員と話し合いを持ち、目標に合わせて実習状況を確認し、指導計画を調整する。
 - ・患者とのトラブル、事故などの問題が発生したときは、その日のうちに情報交換し、対策を立てる。
 - ⑤実習後に反省会の機会を持つ。
 - (4) 受け持ち患者と学生との関係を調整する。
 - ①実習前
 - ・患者（家族や同室者）に、事前に学生が受け持つことの理解を得ておく。
 - ・担当教員を紹介し、患者の情報を提供する。
 - ②実習初日
 - ・患者を紹介する。
 - ・実習指導者、教員、学生は、「臨地実習説明書および臨地実習同意書」をもって患者のところに行き説明する。
 - ③実習中
 - ・患者と学生が良い人間関係がとれているか確認し、必要に応じてサポートする。
 - ・患者の状況により（患者の重症度、患者の拒否的態度など）指導者または教員が支援する。
 - ・学生が必要な情報を得るための仲介役をする。
 - ・実習意欲が高まるような、患者からの情報、学生の評価などを伝える。
 - ④受け持ち患者との関係がうまくいかない場合
 - ・患者や学生の話をよく聴く。
 - ・かかわりの場面や患者の反応を学生と振り返り、原因を探り対処する。
 - ・看護ケアやかかわりの場面では、指導者または教員と一緒に実施する。
 - (5) 他部門との連携を密にし、調整する。
 - ・リハビリテーションや検査などを見学する場合には、目的・必要性についてその部門の責任者に伝え依頼する。
 - ・他部門での実習後は、学生の実習状況を把握する。
 - ・必要時、院内の社会資源（医療相談室）の活用について説明する。
- 2) 基礎看護技術の原理に即した実習ができるよう整備する。
- (1) 看護の基準、手順を整備する。
 - ①学生がどのような看護技術を学んできたか把握する。
 - ②基準や手順に沿って、ケアが実践できるようにスタッフに働きかける。
 - ③必要時、その科特有の技術について講義、デモンストレーションを実施する。
 - ④受け持ち患者の状態や看護内容を把握する。
 - (2) 看護実践に必要な物品の整備をする。
 - ①実習前に定数を確認し、定位置を明示し、物品の点検、整理整頓をする。
 - ②実習内容に応じて、物品の工夫、応用ができるようにしておく。
2. 学生の実習意欲を向上させ、看護への意欲、能力向上への動機付けをする。
- 1) 学生が自己の能力を最大限に発揮できるようにかかわる。
 - 2) 学生を尊重し、主体性を引き出す。
 - 3) 学生の過度の緊張をとり、よき相談者になる。
- 学生の接し方
- ①学生の思いを聴く。
 - ②話を聴ける状況を作り、笑顔でゆとりを持って接する。
 - ③言葉かけを多くする。
 - ④否定的な言い方はしない。
 - ⑤プラス面を評価するよう心がける。

- ⑥学生のレディネスを理解し、能力を期待しすぎない。
- ⑦文献を提供するなど、一緒に学ぶ姿勢を示す。
- ⑧実習を通し、学生個人の価値観、性格、健康状態などについて情報を得、実習指導にいかす。
- ⑨到達目標を学生に再認識させ動機付けをする。

担当教員との連携を密にし、個々の学生を知る。
学生自身が看護判断できるようにかかわる。

3. 科学的根拠にもとづいた看護を実践し、指導者自身の看護観を学生に伝えながら、理論と知識の統合を図ることができるよう指導する。

日々の看護を振り返り、見直し、改善に向けて実践していく。

新しい知識や技術を習得する。

指導者の行ってきた看護についての裏づけ（看護観・知識）を学生に伝える。

学生が、自分の看護を振り返り考えられる場をつくる。

- 1) 患者の安全、安楽が守られるよう指導する。
 - (1) 安全に関するオリエンテーションを確実に行う。
 - ①起こりやすい事故事例を伝える。
 - ②事故発生時の対応について説明する。
 - ③指導者への報告を確実にできるように指導する。
 - (2) その患者にあった、安全、安楽な方法を考えられるようにかかわる。
 - (3) 学生に、安全、安楽な方法を選択させ実施する。
 - 2) 看護実践と理論を関連させながら指導する。
 - (1) 学生が持っている知識と、患者の情報を関連付けて指導する。
 - (2) 学生の気づきや疑問点や問題意識を大切に、実践と理論を結びつけるように指導する。
 - (3) 看護実践の科学的根拠を明確にできるように指導する。
 - 3) 個々の患者にあった看護ケアの実践ができるように指導する。
 - (1) 指導者が個々の患者に関する情報を持ち必要に応じて学生に提供する。
 - (2) 学生の実践能力（何が不足しているのか）を把握し、適切な方法で導く。
 - (3) 学生をチームカンファレンスに参加させ、病棟スタッフと共に看護を考え個別的な看護ケアについて考える。
 - 4) 実践した看護を自己評価できるように指導する。
 - (1) 毎日の行動計画を振り返り、次の日の計画に生かせるように指導する。
 - (2) 患者や家族の言葉を学生に伝え今後の動機付けになるよう援助する。
 - (3) 指導者が看護を実践して見せ、患者への配慮の仕方や技術を学ぶ機会とする。
4. 看護者の倫理綱領に基づいて行動できるように指導する。
 - (1) 常に人間としての尊厳を尊重することができるように指導する。
 - (2) 看護職にふさわしいマナー（挨拶・服装・しぐさ等）を身につける。
 - (3) より良い人間関係を築けるようコミュニケーションを指導者が示していく。
 - (4) 常にプロ意識をもてるような方向付けをする。（患者・スタッフとの対応）
 - (5) 自分自身の健康管理の重要性を指導する。

資料 2

基礎看護実習Ⅰ 実習指導 日案
オリエンテーション 月 日 ()

オリエンテーション実習目標

- 1) 実習病院・病棟の特徴や設備・構造がわかる。医療チームの職種と役割について知る。
- 2) 臨地実習を行う上での注意事項がわかる。
- 3) 身なりを整え、受け持ち患者に挨拶できる。
- 4) 患者と会話ができる。
- 5) 患者に関しての情報収集ができる。

時間	学習目標	学習内容	指導方法・指導上の留意点	場所・担当者・備考
8:30	施設の概要を知る 学生を受け入れる準備が出来る	病院 オリエンテーション 病院施設見学 実習指導者の準備	総看護長あいさつ 病院看護方針などについて 事故、防災、感染防止対策、守秘義務について 病院見学は学生自身が探索する 関係部署に事前に臨地実習について依頼しておく ・受け持ち患者に今日から学生が来ることを挨拶し、再度、了承を得る ・大部屋の場合、同室者へ病室に学生が入ることを告げ、挨拶する ・学生が使用する場所が、整えられているか確認する ・学生の緊張を和らげるため、笑顔で迎え、指導者から学生に自己紹介をする	会議室 看護長 指導者 教員
	実習にスムーズに入ることが出来る	・学生が来棟する ・病棟スタッフに挨拶、自己紹介	・学生の健康状態に注意し、調子が悪ければ我慢しないように伝える ・荷物の置き場を紹介する ・ナースステーション内で立つ位置の誘導をする ・申し送り時、グループリーダーが実習の目的を含めた挨拶を行い、他の学生は氏名を述べて挨拶するように説明する ・指導者は事前に今日の実習スケジュールをスタッフへ説明する ・主治医へも学生を早めに紹介する ・カンファレンス室など、落ち着いた雰囲気のある場所で行う ・記録用紙等は、実物を用いて説明する ・学生の反応を確認しながら説明する ・オリエンテーション終了後、内容が理解できたか確認し、不明な点があれば助言・補足する	ナースステーション 指導者 教員
	病棟の特徴や設備・構造がわかる 臨地実習を行う上での注意事項がわかる	・オリエンテーションをさく	1) 病棟の特徴の説明 ○病棟 ○床 2) 入院患者の特徴 高齢者が多い 身体活動に制限があり、日常生活援助を必要とする患者が多い 3) 当病棟の看護方針 4) 職員構成 看護師 ○名(看護長1名・副看護長1名・実習指導者1名) 看護助手 ○名 専門医 ○名 5) 看護体制 6) 病棟構成 重症個室の位置 個室に入る患者の対象 非常口の場所 患者の重症度と部屋・ベッド位置の関連 7) 災害時の対応、事故防止対策(再確認) 8) 病棟スケジュール(病棟毎に用意) (週間スケジュール) 別紙参照 (一日のスケジュール) 業務内容の説明: 別紙参照 9) 守秘義務について 情報収集の時は、カルテをナースステーションから持ち出さない カルテのコピーはしない 記録物は指定された場所に保管し、放置しない 情報の管理には責任を持ち、メモなどを無くさないよう注意する メモなどを捨てる場合は細かく判断する 病院、学校以外の場所では、得た情報や患者の話をしない 10) その他の注意事項 患者、家族から病気や、治療に関して質問があった場合は、学生であるため答えられないことを伝え、速やかに担当看護師が指導者に報告する 援助は必ず看護師と共に行う 特に患者の体位変換・移動の援助は看護師と共に行う 受け持ち患者以外から何かを依頼された場合は、自己判断で行わず、担当看護師・指導者に確認する 車いすや杖歩行の患者が多いため、病棟内を走ったりせず、安全に配慮する	カンファレンス室 看護長 指導者 病棟オリエンテーションマニュアル 病棟配置図 病棟看護業務マニュアル
		・実際に病棟内を案内し説明する ・学生自身が探索する	1) ナースステーションの構造 ナースコールの位置と表示の見方 (担送・護送・独歩、難聴、付き添い、感染) ナースコール・電話が鳴ったときの対応 学生の記録の場所 実習計画を表示する場所 2) 処置室・器材室・リネン室・汚物室・デイルーム・トイレ・風呂の説明 3) 非常口の確認	病棟内 指導者
	身なりを整え、受け持ち患者に挨拶できる	・受け持ち患者に自己紹介する	・学生指導者と一緒に受け持ち患者のところへ行く ・学生指導者が学生を患者に紹介する ・受け持ち患者に良い印象を与え、実習がスムーズにいくように、笑顔ではっきり名前が言えるようにアドバイスしておく ・大部屋に受け持ち患者がいる場合は、明日から学生が2日間実習に訪室することを、学生と一緒に挨拶する	病室 指導者 教員
	患者に関しての情報収集ができる	・カルテ等から受け持ち患者の情報収集をする	・得た情報を確認し、不足している情報に気づくような発問・助言をする ・患者に行われている援助の内容とその方法 ・病名、現在行われている治療、検査、食事、排泄、清潔、睡眠、移動動作に関すること ・受け持ち患者の援助を行うときに受け持ち看護師が注意していること ・援助の見学の際に特に注意すること ・受け持ち患者の処置や検温に看護師が行くときは、声をかけ、学生と一緒に行く	ナースステーション カルテ・記録用紙
	受け持ち患者と会話出来る	・受け持ち患者とのコミュニケーションをとる	・患者、家族とコミュニケーションがとれたか確認をする ・関われない学生に対しては指導者がモデルを示す	病室 担当看護師 指導者 教員
12:00	実習終了	患者・スタッフへ挨拶をする		

基礎看護実習Ⅰ 実習指導 日案
オリエンテーション 月 日 ()

第1日目実習目標： 1) 患者およびその家族に対して人間としての尊厳、プライバシー、福利を守る姿勢で接する。

第2日目 2) 看護職や他の医療従事者が行っている患者とのコミュニケーションの方法を知る。

3) 患者を取り巻く環境について知る。

4) 保健・医療・福祉チームの職種と役割について知る。

5) 看護活動が展開される様々な場と対象となる人について知る。

6) 看護学生として、学習に意欲を持ち、自主的に学ぶことができる。

7) 実習体験を自分の言葉で表現するとともに、互いの体験を聴き話し合う。

時間	学習目標	学習内容	指導方法・指導上の留意点	場所・担当者・備考	
8:15	立案した行動計画と患者の状態とを照らし合わせ、アドバイスをもとに、一日の行動計画を修正することができる	・受け持ち患者、病棟スタッフへ挨拶	・学生の緊張を和らげるため、笑顔で迎える	ナースステーション 病室 指導者 教員	
			・指導者連絡ノートから前日までの学生の实習状況を把握しておく		
			・教員と情報交換をし、打合せをしておく(学生の状況・カンファレンスのテーマなど)		
8:30			・学生の健康状態に注意して、声をかける	指導者連絡ノート	
			・前日から今朝にかけての患者の情報が収集できているか、確認する		
			・指導者自身も患者を把握しておく		
8:45	行動計画に沿って、日常生活援助が見学できる	・ショートカンファレンスで一日の目標、行動計画を発表	・スタッフ全員が、その日の学生の目標・行動計画がわかるように発表の時間をもうける	ナースステーション 指導者・教員 担当看護師 行動計画表	
			・その日の担当看護師が確認できたか声をかける		
			・学生・担当看護師・教員と話し合い、調整する(時間、援助方法、指導方法、指導担当)		
			・環境整備		病室・訓練棟 指導者 担当看護師 教員 行動計画表
			・バイタルサイン測定と観察の見学		
			・患者の観察ポイントを、疾患・経過と関連づけて説明する		
			・日常生活の援助を見学、できるところは看護師と一緒に 食事介助 排泄介助 清潔介助 移動介助 機能訓練		
			・援助の目的や根拠を理解しておく		
			・患者の安静度を考えて援助方法を選択していることを説明する		
			・援助実施時は、必ず看護師がつき、患者の安全・安楽に責任を持つ		
・日常生活動作の中で、患者の残存機能を考慮しながら援助していることを説明する					
・リハビリテーションの見学がスムーズにできるよう配慮する					
・患者の安全安楽、プライバシーの保持に対して配慮できるように助言する					
12:00	各自1時間昼食休憩	・患者の反応を観察する	・指導者自身も患者の反応を見逃さないようにする	病室 指導者 担当看護師 教員	
			・学生に対しての患者の思いを聴く		
			・学生が患者の反応に気づくことができるよう導く		
			・行ったことが、患者にとってどうだったか、学生が振り返られる場を作る		
14:45	患者の思いや考えを尋ねてみる ことができる	・受け持ち患者の心理的な状況を理解しようと共感的に会話を する	・対象を尊重した適切な言葉遣い、態度がとれるように助言していく	病室 指導者 担当看護師 教員	
			・学生が患者や家族の気持ちをくみ取れていないようなら助言する		
午後	行動計画に沿って行動する				
15:00	実習内容について報告できる	実習内容について担当看護師に報告をする	・学生から声をかけやすい環境を作るとともに、指導者からも積極的に声をかける	ナースステーション 指導者 教員	
			・報告時、患者の観察の視点が正しく把握できているか確認し、不足があれば学生が気づくことができるように助言する		
16:00	実習終了	患者・スタッフへ挨拶をする。	・学生が主体的に運営できるよう見守る	カンファレンス室 指導者・看護長 教員	
			・カンファレンス内容の方向性を確認し、それであれば修正する		
			・行き詰まったら、カンファレンスが継続できるよう必要時助言する		
			・学生の意見から気づきを見出せるような発問をする		
			・グループ全員が意見を言い合えるような場の雰囲気をつくる		
			・必要時、情報を提供し援助の意味づけを助ける		
・時間が守られるよう、必要時学生に声をかける					